



絵本のまち板橋

株式会社若林製本工場

常務取締役 若林 佑一

板橋区舟渡3丁目20-13

創業が明治10年。父が5代目で私が直系の長男になります。140年、上製本や並製本を中心とした書籍の製本を行う会社です。創業が神田の司町で区画整理があって早稲田に移りまして、早稲田も区画整理になりまして、そこから板橋の前野町に移って、今は舟渡の工場になりました。

前野町までは多少の機械もあったのですが基本は手製本で、昭和40年代に私の祖父である先々代がドイツに行きまして「これからは量産型の機械の時代だ」と、手製本で1日数千冊くらいしか作れなかったものが、ドイツの機械は1日で1万冊以上作る。何万単位で作れるという機械を見て、当時の舟渡の工場に入れて「日本で初めて量産型の機械を入れた」というふうに聞いています。

またアジロ製本というのはヨーロッパでは元々あったものなんですけども、私の祖父がこれを日本に持ってきて広めたという伝道者的な一面もあって、だてに100年以上続いているという技術的なものもありますし、昔から「そういう技術は若林製本でしか持っていないから」とか「製本部門を立ち上げたいから若林さん教えて」とか、もちろん他社さんしか持っていない技術もあるんですけども、美観といいますか、上製本の形、そういうものにこだわる技術というのは、おそらく他社には負けないという自負があると思います。

あとは、多分日本でも数台しかない豪華本とかにある金付けの機械とか、小口印刷をインクジェットでフルカラー印刷にする技術を出版系の本に使ったのはうちが初だとか、僕が今この会社に変革をもたらす人間だと自負しているので、常にチャレンジしていくという意識を失ってはいけないなと。その上で従業員を守れるような会社していくことが重要だと考えています。

僕は基本的に本は文化遺産だと思っているので絶対になくならないと思っています。ただ、これから少子化のしわ寄せは絶対に大きくなってきます。物流問題もこれから大きくなっていく。一社ではやはり限界があるので業界全体でそういう問題を解決できるように一緒に考えていけたらなというのは思ったりします。

若林製本はもうすぐ創業150年なんですけど、戸田の工場にロボットを2台入れて、それをモデルケースとして本社にどういうふうに取り入れられるかなど今少しずつ進めている最中で、会社として無難に安泰に行くのではなく、時代の波に乗るようなチャレンジをしていくことで150年、200年と続いていくんじゃないかなと思っています。

